
[成果情報名] 促成栽培イチゴでのミヤコカブリダニを核としたハダニ類の防除体系

[要約] 促成栽培イチゴにおいて、ミヤコカブリダニを 11 月に、チリカブリダニを 12 月、1 月および 2 月にスケジュール放飼し、選択的薬剤を組み合わせる防除体系は従来のチリカブリダニだけの防除体系より効果が高い。さらに、ハダニ類をモニタリングすることによりカブリダニ類の放飼コストを半減できる。

[キーワード] イチゴ、ハダニ類、ミヤコカブリダニ、チリカブリダニ

[担当部署] 病害虫部・虫害チーム

[連絡先] 092-924-2938

[対象作物] 野菜

[専門項目] 病害虫

[成果分類] 新技術

[背景・ねらい]

近年、促成栽培イチゴではハダニ類が多発し、農薬だけでは十分な防除が困難となっている。そのような背景からチリカブリダニの利用が進んでいる。しかし、チリカブリダニは効果がやや不安定であることが普及の妨げとなっている。一方、ミヤコカブリダニは飢餓耐性が強くハダニ類が低密度でも定着性がよく、ハダニ類に対する有効性も示された（参照：九州沖縄農業研究成果情報第 21 号）。そこで、定着性のいいミヤコカブリダニと捕食能力の高いチリカブリダニを組み合わせた防除体系を構築する。

（要望機関名：福岡普(H16)）

[成果の内容・特徴]

1．促成栽培イチゴでは、ハダニ類をモニタリングするのは困難なため、以下のスケジュール放飼を防除体系の基本とする（図 1・下）。

10 月下旬のビニル被覆後にコロマイト水和剤でハダニ類の密度を下げる。

11 月上旬にミヤコカブリダニを約 5 頭 / m²放飼する。

12 月に約 5 頭 / m²、1 月と 2 月に 2 ~ 3 頭 / m²のチリカブリダニを放飼する。

ハダニ類が増えた場合にはマイトコーネフロアブルで補完防除する。

2．本体系は、放飼前散布のない従来の体系（図 1・上）と比べて、ハダニ類に対する防除効果が顕著に向上し、放飼後の薬剤散布回数が減少する（図 1・下）。

3．ハダニ類のモニタリングに基づくと、スケジュール放飼に比べてカブリダニ類の放飼コストを半減できる。その場合、ミヤコカブリダニを 11 月に放飼し、ハダニ類が増加してきたらチリカブリダニを放飼する（図 2・上）か、小葉当たり約 2 頭に達したら選択的薬剤を散布する（図 2・下）。

[成果の活用面・留意点]

1．防除の手引きにマニュアルとして掲載し、促成栽培イチゴにおける防除資料とする。

2．ハダニ類のモニタリング法：圃場全体から約 150 小葉 / 10a を選び、葉裏に生息する雌成虫を数える。

3．ハダニ類以外の病害虫を防除する場合には、カブリダニ類に影響の小さい選択的農薬を使用する。具体的には、防除の手引きに掲載するマニュアルを参照する。

[具体的データ]

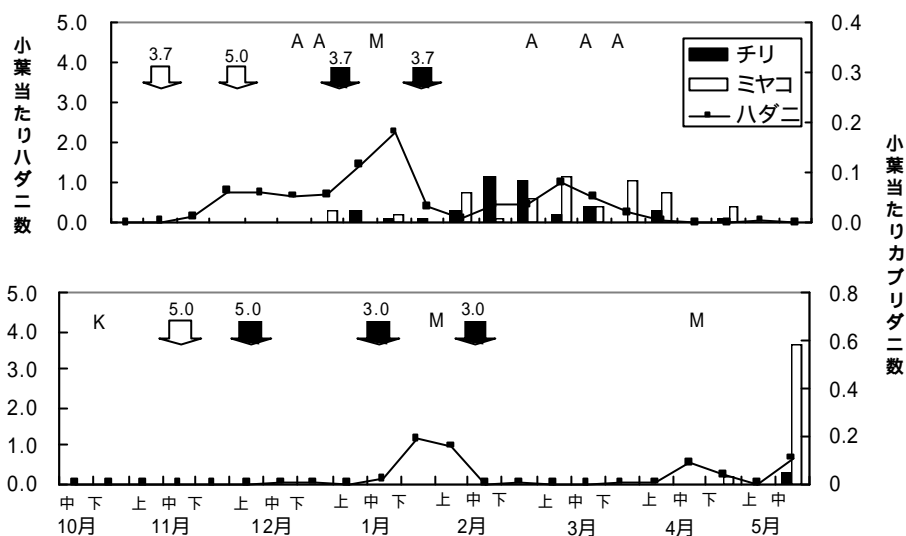


図1 スケジュール放飼体系のハダニ類に対する防除効果：放飼前散布なし（上、2004年）・放飼前散布あり（下、2005年）（農家A）

:ミヤコカブリダニ放飼
 :チリカブリダニ放飼 （数値は㎡当たりの放飼頭数を示す）
 A :アカリタッチ乳剤 K :コロマイト水和剤 M :マイトコーネフロアブル

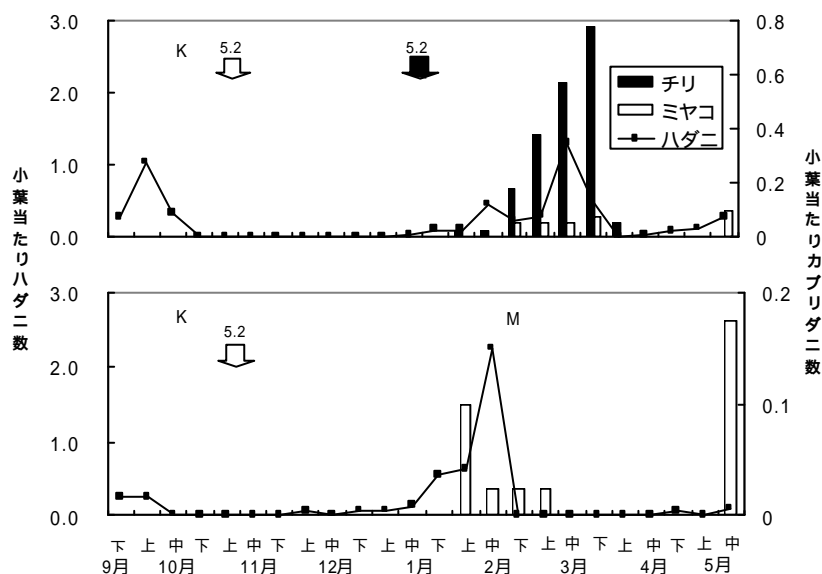


図2 モニタリングに基づく放飼体系のハダニ類に対する防除効果：ミヤコ1回+チリ1回放飼（上）とミヤコ1回放飼（下）（農家B、2006年）

注）図中の表記は図1に準ずる

[その他]

研究課題名：暖地の施設イチゴにおける病害虫総合管理システムの体系化と実証
 予算区分：独法受託（生物機能）
 研究期間：平成18年度（平成16～20年度）
 研究担当者：嶽本弘之、浦広幸